

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530513

研究課題名（和文） リスク応答的な社会づくりに関する研究

研究課題名（英文） Study on the Building of Risk Responsive Society

研究代表者

今田 高俊（IMADA TAKATOSHI）

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授

研究者番号：00107517

研究成果の概要（和文）：

本研究では、リスクとは何であり、リスクがどのように生み出されどう分配されているのか、とくに今後、われわれはリスクとどのように向き合い、対応していけばよいのか、を明確にするために、ソリューション研究の視点から考察を加え、「リスク学」を構築するための枠組みについて幾つかの問題を検討した。

①現実社会に存在する各種のリスクを網羅的に把握して、それらを測定する必要があり、そのためのリスク指標の体系化をおこなうこと。本研究ではその暫定版を作成した。

②リスクリテラシーを涵養するための条件と方法を理論化すること。リスクに対応できる社会を構築するには、社会の構成員である個人レベルでリスクに関する理解を深めることにより、不確実性への対処能力を高める必要があり、そのための理論についての指針を示した。

③リスクに関する正確な情報を、市民や専門家や行政などの関係者間で相互に意思疎通をはかることで、リスクの社会的受容や対応の合意形成をスムーズにすること（リスクコミュニケーション）、および共助によるリスク対応の在り方についての枠組みであるリスクガバナンスの定式化をおこなうこと。本研究では、研究の途中に発生した東日本大震災による原発事故や高レベル放射性廃棄物の処分問題を取り上げ、安全神話づくりや情報開示の不十分さが、いかにリスクコミュニケーションおよびリスクガバナンスが歪められてきたかを明らかにした。

以上要するに、リスク学の構築には、リスク指標の体系化と測定、リスクリテラシーの涵養、およびリスクコミュニケーションを通じたリスクガバナンスの在り方が不可欠となることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： In this study, I inquired the analytical framework constructing *Social Risk Science* from the viewpoint of solution research which clarifies the following questions: What is risk; how are the social risks produced and distributed among people; especially how do we face and deal with the risks. Result of the research is that *Social Risk Science* will be formulated as followings.

1) It is required to collect and measure the various types of risk in full detail and systematize the social risk indicators. I created in this study the preliminary version of their systematization.

2) It is required to theorize the conditions and methods for cultivating risk literacy. To construct a society capable of responding appropriately to the risk, each people must improve capabilities to cope with risk through promoting greater understanding of risk. I established its theoretical guideline.

3) The most important point of constructing *Social Risk Science* is to formulize the analytical framework of *Risk Communication* and *Risk Governance*, which acceptance of risk and consensus building for dealing with risk go on smoothly in civic community level. In this study, taking up the problems on the Fukushima No.1 nuclear power plant accident and the disposal of high-level radioactive waste, I discussed critically that the myth of safety and insufficient disclosure of information had distorted the people's risk communication and risk governance.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			0
年度			0
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：制度・構造・社会変動 リスク社会、リスク管理

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、様々なリスクが生活諸領域で発生している。これからの社会はリスクへの対処に敏感でなければならない、という認識はおおいに高まった。しかし、現状では、リスクについての体系的な知識の整理ーリスク学の構築ーがなされているとは言い難い。

(2) リスクとは何であり、リスクがどのように生み出されてどう分配されているのか、とくに今後、われわれはリスクとどのように向かい合い、対応していけばよいのか、その方向性が明確ではない。

2. 研究の目的

本研究は、以下の試みを実施することを目標とした。

(1) どのようなリスクが、どこで、生み出されているかを見定める、リスクの識別とプロファイリングのための理論と方法について検討する。

(2) リスクの大きさを評価し、そのリスクが許容できるか否かを判断するリスクアセスメント基準について検討する。

(3) 社会生活を取り巻くリスクに関する

3. 研究の方法

本研究では、リスク応答的な社会づくりへ向けての理論的整備を試みた。すなわち、リスクの概念(含指標)と類型、リスクの分析枠組み、リスクへの対応策に関する総合的方策について検討し、リスク応答的な社会づくりによる安全・安心な社会生活のための研究枠組みの整備と政策的提言をおこなうことである。このために、

(1) リスク社会への転換についての理論的考察を、富の生産・分配からリスクのそれとして試みる。

(2) 現実社会のどこにどのようなリスクが存在しているのかを把握するために、リスク指標の体系化とアセスメント方法を考察する。

(3) 安全と信頼をベースとした、安心できる社会リスク管理の在り方を、行政依存的な方向(公助)にのみ委ねるのではなく、また市場原理によるサービス(自助)に委ねてしまうのではなく、市民による支え合い(共助)によるリスク対応を活性化する方向で考察を加える。

4. 研究成果

(1) リスク指標の体系化については、従来の社会指標や生活の質指標などを参照しつつ

、以下のような指標を暫定的に体系化した。

3. 研究の方法

本研究では、リスク応答的な社会づくりへ向けての理論的整備を試みた。すなわち、リスクの概念（含指標）と類型、リスクの分析枠組み、リスクへの対応策に関する総合的方策について検討し、リスク応答的な社会づくりによる安全・安心な社会生活のための研究枠組みの整備と政策的提言をおこなうことである。このために、

(1) リスク社会への転換についての理論的考察を、富の生産・分配からリスクのそれとして試みる。

(2) 現実社会のどこにどのようなリスクが存在しているのかを把握するために、リスク指標の体系化とアセスメント方法を考察する。

(3) 安全と信頼をベースとした、安心できる社会リスク管理の在り方を、行政依存的な方向（公助）にのみ委ねるのではなく、また市場原理によるサービス（自助）に委ねてしまうのでもなく、市民による支え合い（共助）によるリスク対応を活性化する方向で考察を加える。

4. 研究成果

(1) リスク指標の体系化については、従来の社会指標や生活の質指標などを参照しつつ、以下のような指標を暫定的に体系化した。正確な情報を、市民や専門家や行政などの関係者間で相互に意思疎通をはかることで、リスクの社会的受容や対応の合意形成へ向けてのリスクコミュニケーションと、共助によるリスク対応の在り方についての枠組みを定式化する。

主なリスク			
	ミクロ	メゾ	マクロ
自然	火災	降雨、地すべり、噴火	地震、洪水、干ばつ、竜巻
健康	病気、怪我、障害、水、室内空気汚染、労災、	パンデミック、食中毒、水、室内大気、職業・環境災害、	パンデミック

	生活習慣病、精神疾患、医療ミス、	食品添加物、シック症候群、アスベスト、化学物質、粉じん・アスベスト	
社会	犯罪、家庭内暴力、薬物中毒、パワハラ、セクハラ	テロ、非行集団、出会い系サイト、援助交際	内乱、戦争、社会的激変、薬物中毒、幼児虐待
経済	失業、凶作、自己破産、長時間労働	失業、凶作、再定住、消費期限・産地の偽装	優良企業の倒産、通貨・金融危機、市場取引の衝撃
行政・政治	民族差別	民族紛争、暴動、化学・生物兵器による大量殺戮、行政管理に起因する事故と災害	政治に起因する社会プログラムの機能不全、クーデター
環境・情報	耐震偽装、ごみ処理、アダルト系サイト、有害情報	公害、酸性雨、森林破壊核の惨事、土壌と水の塩分	地球温暖化、流言飛語、監視社会

(2) 市民参加によるリスク管理を充実するためのリスクコミュニケーションの在り方について、行政・専門家・市民の三者によるリスクに対する理解、意思疎通、合意形成の視点から考察を加えた。そして、リスク対応についての方法として、公助（行政が対応）・自助（市場が対応）・共助（市民の支え合いが対応）を区別し、この3者の在り方について境界基準を考察した。とくに、リスクマネジメントおよびリスクリテラシーの視点から望ましいリスク対応の分担を考察することを通じて、共助の意義をリスクガバナンスの視点からする必要性があることを解明した。

(3) 研究の最中、2011年3月11日に、東日本大震災ならびに福島第一原発事故が発生し、激甚な被害がもたらされた。本研究は、まさにこうした事態に対応できる「リスク学」をめざすべきであるとの認識から、そのリスク論的考察を試みた。とくに福島第一原子力発電所事故と安全神話の崩壊および高レベル放射性廃棄物（核のごみ）の処分について考察した。その結果、以下の知見を引き出すことができた。

①「事故」の前に「想定外」という言葉を冠して、事故を天災によるものであるかのように位置づけることは、人災であることを可能な限り覆い隠そうとする心性を反映している。大地震と大津波は確かに天災であるが、今回の原発事故に関してはリスク管理の甘さによる人災のほうが大きい。

②高リスク技術である原発の安全神話づくりには社会的な落とし穴があることを認識すべきである。経済効率と安定供給の両面で原発エネルギーは、化石燃料エネルギーや再生可能エネルギー等と比較して突出して優れている。しかし、最大の弱点が安全性である。このため産官学が連携して安全神話づくりがおこなわれてきた。しかし、安全神話により日本国民は原発リスクリテラシーを涵養する機会を逸してきたといっても過言でない。安全神話によって理性の眠りについてしまうのではなく、リスクについての理解を深めることにより、不確実性への対処能力を高めることが求められる。

③日本の地質学的状況を前にすれば、核のごみの地層処分にはきわめて高いリスクが存在する。精緻なリスク認識に基づいた対応が必要であり、安易な安全神話づくりに陥らないようにすることが重要である。円滑なリスクコミュニケーションの確保とリスクについての民主的な熟議が求められる。それは、社会を取り巻くリスクの関係当事者間で意思疎通をはかることにより、場合によっては

徹底的な討論をすることにより、リスクへの対応策についての合意形成をはかることである。

(4) 以上の、研究を踏まえ、今後は《リスク学》の彫琢がきわめて重要であるとの認識に至るとともに、その枠組みの概略を与えた。

そのポイントは、リスク指標、リスクリテラシー、リスク管理、リスクコミュニケーションと熟議、市民の手によるリスクガバナンスについての概念的・理論的整備が求められることである。具体的には、①どのようなリスクが、どこで、生み出されているかを見定める、リスクの識別とプロファイリングのための理論と方法についての検討。②市民にとって分かりやすいリスクの解説とその理解能力を高めるリスクリテラシーの涵養。③リスクを評価し、そのリスクが許容できるかを判断するリスクアセスメント基準についての検討。④社会生活を取り巻くリスクに関する正確な情報を、市民や専門家や行政などの関係者間で相互に意思疎通をはかることで、リスクの社会的受容や対応の合意形成へ向けてのリスクコミュニケーションと、共助によるリスク対応の在り方についての枠組み、すなわちリスクガバナンスの定式化。

高リスク技術社会に生きる市民にとって、歪められた安全神話に呪縛されないためにも、リスク学の彫琢が不可欠である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

①今田高俊・船橋晴俊、高レベル放射性廃棄物をめぐる新たな議論の枠組み—日本学術会議からの提言、科学(岩波書店)、査読無、Vol.82 No.12、2012、1295-1300

②西山昇・今田高俊、ゼロリスク幻想と安全神話のゆらぎ、View & Vision、査読無、No34、2012、57-64

③今田高俊 (書評論文) 『グローバリゼーション—現代はいかなる時代なのか』社会学研究、査読無、No. 87、2010、177-185

[学会発表] (計1件)

Imada, Takatoshi, A large-scale Research Project: Network Building on the Integrated Social Science Database Solution, Paper presented to the *Symposium on the Social Science Infrastructure* held in the Universität zu

Köln (ドイツ), Sept. 7-9, 2011.

〔図書〕 (計 4 件)

- ①橋木俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹編、リスク学とは何か (新装増補版)、リスク学入門 1、岩波書店、2013、220pp.
- ②今田高俊編、社会生活からみたリスク (新装増補版)、リスク学入門 4、岩波書店、2013、200pp.
- ③金子勇・藤田弘夫・吉原直樹・盛山和夫・今田高俊、社会学の学び方・活かし方、勁草書房、2011、335pp
- ④今田高俊・鈴木正仁・黒石晋編、社会システム学をめざして、シリーズ社会システム学別巻、ミネルヴァ書房、2011、296pp.

〔その他〕 (計 12 件)

- ①橋木俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹、(共同討論) リスク学の再定義と再構築ー3.11 を踏まえて、橋木俊詔・長谷部恭男・今田高俊・益永茂樹編、リスク学とは何か (新装増補版)、リスク学入門 1、岩波書店、2013、179-205
- ②今田高俊、3.11 後の社会とリスク対応、今田高俊編、社会生活からみたリスク (新装増補版)、リスク学入門 4、岩波書店、2013、149-162
- ③今田高俊、高レベル放射性廃棄物問題で日本学術会議が言いたかったこと、Energy for the Future, Vol.37 No.2, 2013、26-29
- ④今田高俊、(インタビュー) 高レベル放射性廃棄物『暫定保管』の衝撃、サイエンスポータル、第 81 回 (1-5)、2012、<http://scienceportal.jp/HotTopics/interview/interview81/>.
- ⑤今田高俊、(インタビュー) 高レベル放射性廃棄物『暫定保管』の衝撃、サイエンスポータル、第 81 回 (1-5)、2012、<http://scienceportal.jp/HotTopics/interview/interview81/>.
- ⑥西山昇・今田高俊、ゼロリスク幻想を超えてー東日本大震災と福島原子力発電所事故のソリューション研究、東京工業大学社会理工学研究科、災害リスクソリューションに関する体系的な研究、2012、152-164
- ⑦今田高俊、成熟社会をめざして、武田計測先端知財団編、自己組織化で生まれる秩序ーシロアリ・量子ドット・人間社会、ケイ・ディー・ネオブック、2012、57-83
- ⑧今田高俊、リスク社会の到来と課題ーソリューション研究の視点から、東京工業大学大学院社会理工学研究科、リスクソリューションに関する体系的な研究、2011、2-12
- ⑨今田高俊、社会理論における合意形成の位

置づけー社会統合から社会編集へ、猪原健弘編著、合意形成学、勁草書房、2011、17-36

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今田 高俊 (IMADA TAKATOSHI)
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授
研究者番号：00107517

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし